

東日本大震災から9年「忘れない！」(臨時通信)

2020年3月11日に予定されていた全校集会が、新型コロナウイルスの影響で中止となりました。

それに先立つ早朝の「思いを寄せる日/「被災者の方々を忘れない」呼びかけ運動」(2011年11月11日から続けている)も中止になりました。

私たちはいま、どう向き合うか……。全校集会で予定されていたプレゼンテーションのごく一部を通信にしました。是非、ご家族と共に、お読みください。



■2011年3月11日午後2時46分。

マグニチュード9.0の大きな地震。町を飲み込んだ真っ黒な津波。そして、原発事故。あの未曾有の大災害から9年。

■「忘れない！私たちはこれからもずっと被災者の方々と共にあります」

盈進はこのスローガンを掲げ、震災直後に全校集会を開き、学校全体で支援・交流活動をする決意し、取り組んできた。その一環として2011年から2013年までの3年間、夏休みに先輩方が被災地の宮城と福島を訪れ、出合った方々と交流した。現在も電話やお手紙でつながっている。

■ずっとつながっているひとたち

☆宮城は、津波で最愛の夫を失った遠藤和美さん(現在は宮城県女川在住)

☆福島は、東京電力福島第一原発事故の放射能汚染で避難生活を余儀なくされた福島県川俣町山木屋在住の大内秀一さん。父・佐市さんは旧日本軍(海軍衛生兵)時代、広島で原爆の残留放射能を浴びた「入市被爆者」で、郷里福島で人生二度目の放射能被害にあい、ふるさと山木屋に戻ることなく2014年に亡くなった

■17,18,19年度はOG・OBが東北を訪問(レポート)

2017,18年度は、中高時代からつながり続けてきたOGやOBが現地を訪れて、被災地を歩き、時にはその地で踏ん張って生きている人たちにインタビューして、その声を現役生徒に伝えてきた。だから、2017,18年度の全校集会のプレゼンテーションは、OGやOBの現地レポートと、約3ヶ月に一度、電話インタビューして記録した被災者の方々の声をつなげたものだった。今年19年度もその予定だった。

■9年の歩みと現在を発信

今年2月、中学時代から東北とつながっている高橋和先輩（ヒューマンライツ部OG / 立命館大学2年生）と同じくOG松田殊里先輩（関西大学3年生）が福島を訪問し、震災から9年の現状を記録した。このレポートは、その記録と現役の中高生が電話連絡や手紙で交流して記録してきた「被災者の声」とつなぎ合わせたものである。（今年度（19年度）は遠藤和美さんとの日程が合わず、約一週間、福島だけの訪問となった）9年間の歩みと現在を発信する。

宮城 / 夫を津波で亡くした遠藤和美さんとの交流

■「震災がなかったなら…」

最愛の夫を津波で亡くした遠藤和美さん。2011年7月、宮城県岩沼の仮設住宅で出会った。彼女は現在、同県女川に暮らす。

8年前のお手紙の一部。

「あの日一番見たくなかった亡骸が、目の奥に焼き付いて忘れられないのです。そして泣く毎日。震災がなかったなら…と思うばかりです」

6年前のお手紙の一部。

「お父さんが逝ってしまって間もなく3年。あの日で振り子は止まったままで、もう動き出すことはありません。私は思い出の中を彷徨っています。私にとってはもう3年、ではなく、まだ3年です」。

■「ずっとつながっている。それが私の支えです」

先月、ヒューマンライツ部員が行った遠藤さんへの電話取材。

「生きていることは、当たり前ではありません。そのことに感謝して一日一日をどうか大切に……。広島、そして、盈進のみなさんとずっとつながっている。それが私の支えです」。

悲しみは消えない。それでも凜と前を向く遠藤さんの姿に力をもらっていたのは私たちのほうだった。

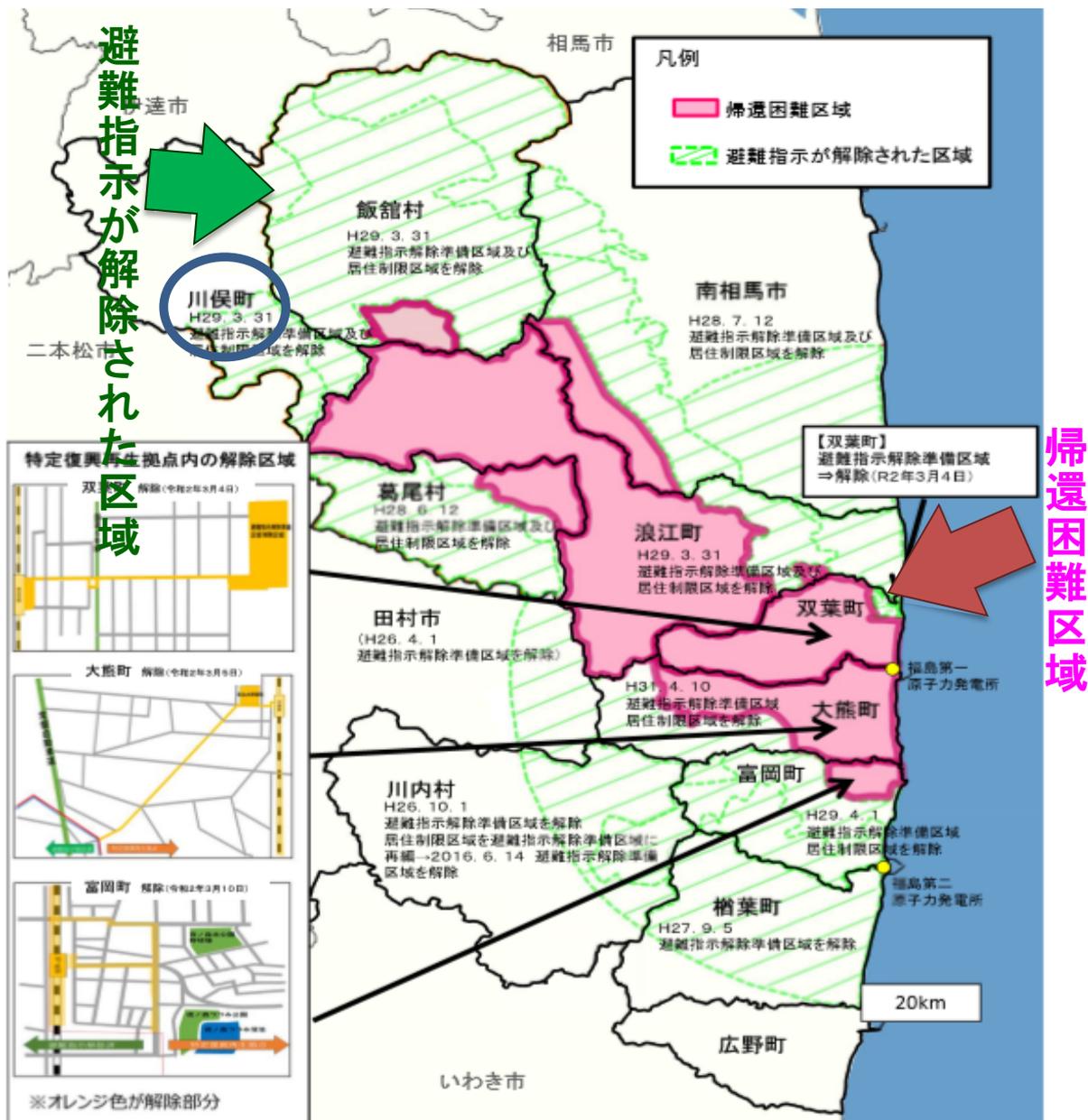


2014年7月/宮城県岩沼の仮設住宅で



2015年3月/遠藤さんを招いての盈進全校集会

福島 / 原発事故・放射線被害とそこで生きるひとたち



緑色で囲まれた場所は避難指示が出されたが、現在はそれが解除された地域。

ピンク色で囲まれた、大熊町・浪江町・双葉町の一部は「帰還困難区域」に指定されており、避難指示が解除されておらず、未だ除染も行われていない地域がある。

福島県全体の避難者は4万人超。県外への避難者は30914人（2020年3月10日復興庁）。

■「俺がここで生きている証」

福島県川俣町山木屋に暮らす大内秀一さん。父・佐市さんは75年前の広島で被爆し、ふるさと福島で人生二度目の放射線被害に悲しんでいた。避難生活の中、2014年に亡くなった。秀一さんは、子どもたちのために、ふるさとで自然塾を開こうと夢見ていた。その矢先の原発事故。大切に守ってきた畑や山は汚染され、打ちのめされた。

2017年、ようやく避難指示解除となったふるさとの川俣町（上地図○印）の山木屋

に帰還し、自然とともに生きる生活をゼロからスタートさせた。

38年間続けた「田んぼスケートリンク」も再開させた。リンクからは国体選手も数多く育っている。「38年間の子どもたちとの思い出がつまったこのリンクは何があっても続けなくちゃ。これは俺がここで生きている証なんだ」。



2020年2月 左から、松田、高橋、大内秀一さん 2019年2月 山木屋田んぼスケートリンク

■「とりあえず、やってみるべー！」

大内秀一さんとのご縁でつながったのは、川俣町でシルク工場を営む齋藤寛幸さん。「機械はスイッチを入れれば動くけど、人の気持ちはなかなか……」と、震災当時を振り返った。

「シルクを加工する工場で、放射能汚染を懸念した他県の会社に『福島産と一緒にしないでくれ』と言われた。シルクの生地は震災前より売れなくなった。だから私の会社はハンカチやスカーフなどを独自で製品化して販売することになった。すると、それまでは見えなかったお客さんの笑顔が直接、見えるようになったんです。『これ見て！これが世界一薄い絹の布だよー！！』とか言ってね。できるかできないかじゃない。やるかやらないかだ。とりあえず、やってみるべー！」



齋藤さんのシルク工場(2019年2月)



齋藤さんの工場生産される最高級シルク
Made in Fukushima Kawamata は世界ブランドだ

■風評被害、家族の離散、生きがいの損失…

渡辺とくいさん。2017年まで福島県川俣町山木屋地区の民生委員として勤務。原発事故によって避難生活を強いられ、同年8月から生活支援相談員として避難者の相談に応じるようになった。渡辺さんにお話を聞いた。

【渡辺とくいさんのお話】

岩手県に行って、岩手の人にこんなことを言われた。「私たちだってあなた方の原発のせいで苦労してるのよ」と。私はすぐさま、反論しました。

「私たち福島の方は、東京電力福島原発の電源は使っていません。今の発言は誤りです。東京など大都市には原発はつくっちゃいけないという法律があるので、東京の人々のための原発が福島にあるんです。撤回してください。」

同じ東北でもこのような風評が……悲しいですね。

『避難する、しない』で言い争い、家族の離散や仲たがいの目にしてきた。多くの山木屋住民が生きがいにしてきた農作業もできなくなった。原発事故によって地域のコミュニティ、人と人とのつながりまで狂わされました」。



渡辺とくいさん(2020年2月)



渡辺とくいさんと大内秀一さんと(2020年2月)

■おわりに

宮城県女川の遠藤和美さん。先日電話したとき、こんなことをおっしゃっていた。

「いま、いちばんの心の支えは、なんとかして来年、新校舎になった盈進を再び訪れ、生徒のみなさんに会うことなんですよ」。つながっている！と思い、やっぱりうれしかった。

怒りや悲しみをパワーに変え、魅力あふれるふるさとを取り戻そうと奮闘する福島の人々の姿は眩しかった。避難先で生きると決めた人もいる。未だ揺れている人もいる。でも、それぞれに苦しみを抱えながら、一生懸命生きている。私たちにできること。誰もが胸を張って「福島出身です」と言えるように、私たちひとりひとりが福島を忘れないこと。

台風、豪雨、地震など、全国各地で災害が多発し、甚大な被害が相次ぐ。私たちも西日本豪雨災害を経験した。震災はいつでも誰にでもふりかかる。だから日頃から身近な人々とのつながりを大切にすること。かけがえのない命を守るために備え、同じように仲間の命を大切にすること。それがあの日を忘れないこと。



2011年11月11日から続く「思いを寄せる日」